The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大衆文学とジェンダー研究のために ： 「通俗小説」作家・加藤武雄作品ビブリオグラフィー
Author(s)	木村, 涼子
Citation	大阪大学教育学年報. 2015, 20, p. 127-138
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

大衆文学とジェンダー研究のために—「通俗小説」作家・加藤武雄作品ビブリオグラフィー

木　村　涼　子

要旨

本稿は、戦前大いに活躍したにもかかわらず、現代では「忘れられた作家」となった加藤武雄に焦点を当てて、女性読者の誕生と大衆文学の発展に関してジェンダーの視点から研究をすすめるための史料の整理と、今後の分析枠組み案の提示を目的としている。筆者による＜女が読む小説＞についての一連の社会学的研究（木村（2004）、木村（2006）、木村（2010））を次の段階にすすめるための研究ノートである。

新聞や婦人雑誌、娯楽雑誌に掲載される、現代を舞台に家庭や恋愛を題材とした大衆小説は、女子教育普及を背景として大正期以降飛躍的に増加した女性読者を主たるターゲットとしていたことから、戦前「通俗小説」と言われ、文学史上劣位に置かれてきた。1920年代から30年代にかけて、「純文学」と区別される「大衆文学」の中でも、読者の性別によるサブジャンルの序列が暗黙のうちに生み出されていた。男性を主たる読者とする歴史小説・時代小説（および、場合によっては探偵小説・推理小説も含まれる）は「大衆文学」の「嫡子」と考えられ、女性を主たる読者とする現代小説は、「純文学」と比べて蔑視されるのはもちろん、歴史小説・時代小説よりもさらに劣位に置かれるという現象がおこった。そのことは端的に、当時の「通俗小説」という名称の用いられ方に示されている[(1)]。「大衆文学／大衆文芸／大衆小説」という名称を、女性を主たる読者とする小説、換言すれば婦人雑誌に掲載される（類の）小説には使わせず、それらには「通俗小説」という名称を割り振るという排除と序列化が文壇・マスメディアの世界で生じたのである[(2)]。

そうした排除・序列化が文学史・文学研究の中でも引き継がれ、戦前に花開いた「通俗小説」文化、人気を呼んだ作品や著名な作家を「忘れられた」存在としてきた[(3)]。本稿は、戦前大いに活躍したにもかかわらず、現代では「忘れられた作家」となった加藤武雄に焦点を当てて、女性読者の誕生と大衆文学の発展に関してジェンダーの視点から研究をすすめるための史料の整理を目的としている。筆者による＜女が読む小説＞についての一連の社会学的研究（木村（2004）、木村（2006）、木村（2010））を次の段階にすすめるための研究ノートであるため、ここで扱う書誌的な情報の整理が、いわゆる書誌学の作法には基づいていないことをあらかじめお断りしておきたい。

加藤武雄は1888年に神奈川県で生まれ、高等小学校卒業後、小学校の訓導をしながら文芸雑誌に投稿をつづけ、1910年23歳の時に上京して新潮社の社員となった後、農民文学を志向しつつも、新聞･雑誌などメディア大衆化の波に乗って大衆小説を書くようになり、1956年に没するまで活躍しつづけた流行作家である。「『不滅の像』その他多数の通俗的、大衆的の小説の作家として、豊富、強靱の力量を発揮して、菊池寛に優とも劣らぬ名声を馳せた」（152頁　中村星湖「加藤武雄を偲ぶ　加藤武雄君のこと」『農民文学』1956年11月号）といった評価は、昭和初期から戦後にかけての雑誌記事や文学批評に数多く見出すことができる。しかしな

がら、当時からすでに加藤に対して、その地位を引き下げる力学がさまざまな形で働き、自身も「通俗小説」作家であることについて葛藤を抱えていたことが、残された史料や親族のインタビューなどからわかってきている。

加藤武雄が抱いていた内面の葛藤には、以下のような5つの次元があったと考えられる。第一に婦人雑誌を舞台として活躍することについて（女性向けの大衆小説を意義あるものとして書きたいという欲求、女性向けの大衆小説を「通俗小説」と蔑視する風潮への抵抗、それらと裏腹に「本当に書きたい小説はこれではない」という焦燥が常につきまとう）。第二に都会をめざし農村を捨てたことについて（農民文学を志しながら農村から都会に出たことへの忸怩たる思い、故郷で父母を支えて苦しい農業をしている弟への思い、トルストイや二宮尊徳そして「義民」へのこだわり）。第三に「家長」という立場について（大衆小説の原稿料の高さを背景に、一家を養うため、さらには故郷の両親・弟夫婦を経済的にサポートするために、大衆小説を書きたい／書かざるを得ない状況）、第四にどのような文学を目指すかについて（私小説・心境小説・プロレタリア文学・田園文学それぞれに対する共感と距離感、芸術のための文学ではなく社会改革のための文学を志向、運動と文学を結合することへのこだわり、大衆読者を意識した文学の必要性の主張）、第五に自身の経歴について（高等教育学歴がなく「同窓」という社会関係資本に欠けていたこと。文壇形成には帝大・早稲田・慶応が大きな役割を果たしたことはよく知られている。大学卒学歴を持たないことを意味するに等しい「投書家あがり」という蔑称に関して加藤自身何度も書き残している）。以上5つの次元は相互に関連している。

加藤の内面にみられるこれらの葛藤は、近代的な家父長制の展開とそこにおける性差別、近世の身分制度をある程度引き継ぎつつ資本主義経済体制下で再編される社会階級、産業化による都市と地方の格差、近代的な学校教育制度と業績主義の発達といった、社会全体の力学を背景としていると認識すべきだろう。

社会における複数の対立軸を基に、内面の葛藤を抱えた加藤は、彼が目指すところの自然主義文学あるいは農民文学、一部のインテリゲンチャに限られない広い読者を意識した大衆文学（その中でも恋愛や家族をあつかった現代小説と歴史小説の二種類が区別される）、未来のある子どもたちに願いをたくす児童文学や少年少女小説など、多様な作品を生み出した。

彼が晩年に書き上げようとしていたのは田中正造の物語である。農民のために闘った田中正造は、加藤が内面の諸葛藤を乗り越えるために最もよい主題だったと思われる。そうした経緯をジェンダーの視点をくわえながらたどるための史料として、加藤武雄の小説群を整理したものが、以下の表「加藤武雄（1888～1956）主要小説作品と発表後の展開状況」である。

この表は、文献（安西（1979）、加藤正彦（2010）、高木（1987）等）を参照しつつ、図書館や古書市場で現物を入手･確認して作成した。投稿時代のものや短編には夥しい数があるため、ここでは長編を中心とし、短編は短編集としてまとめられたものを挙げている。また、評論や随筆などは省いている。時間をかけて確認作業をすすめた結果の作表であるが、作品によっては不明な部分が残されている。

この一覧から、加藤武雄が戦前いかに活躍した作家であったか、が浮かび上がる。最初に新聞雑誌などに発表された作品が、まず単行本になり、その後、文庫として再版されたり、全集に収録されたり、さらには映画化されたりと、何度もひとびとに享受されている。また、戦後に粗末な紙質や装幀ながら、つぎつぎと加藤の作品が再版されている状況にも注目したい。太平洋戦争中の物資不足やマスメディア統制の下、「文化」に飢えていたひとびとが、再版された大衆小説を大いに歓迎したことが推測できる。またこの表では、恋愛･家庭をテーマとした現代もの「通俗小説」の長編、「文学志向」の短編、歴史小説、子ども・少年少女向け小説などをどのようにかき分けていったのかのプロセスも追うことができるよう、記号を加えた。

これらの史料を活用して、上記の議論を詳しく論じるのは次稿としたい。

注

(1)　明治期以降、文学のサブジャンルの名称はさまざまに変遷・展開してきているため、ていねいに論じる必要があるが、ここでは、1920〜1930年代に焦点をあてて「通俗小説」という名称の意味をとらえる。

(2)　文学やメディア領域におけるジェンダー秩序をとらえるという立場ですすめられている本研究は、飯田（1998）や鬼頭（2013）などのジェンダーの視点からの文学研究と問題意識を共有している。

(3)　例外的な存在として菊池寛・吉屋信子が挙げられるが、その点についての説明、また加藤武雄の経歴および作品の特徴については木村（2004）・木村（2006）を参照されたい。

表　加藤武雄（1888～1956）主要小説作品と発表後の展開状況

＜記号の説明＞　*ジャンル分けしがたいもの・内容が不明のものは無印
○家庭や恋愛に関する現代もの大衆小説（いわゆる「通俗小説」）
●「純文学」・農民文学を志向した小説
◎少年少女小説（子ども向け歴史・偉人伝含む）
▲歴史小説（おとな向け）

発表年	作品名　および　その後の再版・映画化などの情報 （　　）内は初出媒体名、連載については開始年で記載
1912	▲『歴史小品最後の一節』新潮社：発表時ペンネーム　浩堂生
1917	▲『歴史小品血煙』新潮社：発表時ペンネーム　浩堂生
1919	●『郷愁』短編集（標題作品の初出は『文章世界』）新潮社 →1925年『土を離れて』と解題し新潮社より再版
1920	「先駆者」（『やまと新聞』） ●『夢みる日』短編集　新潮社
1921	●『処女の死』短編集　新潮社 ●「悩ましき春」（『福岡日日新聞』連載）→同年、同名単行本として新潮社より出版 →戦後1948年共立書房より再版 →1988年加藤武雄記念会より復刻
1922	○「久遠の像」（『婦人之友』連載）　→1923年同名単行本として新潮社より出版：蕗谷虹児装幀・挿絵 →1927年松竹蒲田にて映画化 →1928年『現代長編全集第7巻』として新潮社より再版 →1933年文庫本として新潮社より再版 →戦後1947年湊書房より再版 ○「廃園の花」（『主婦之友』掲載）　→1924年単行本としてサクラヤ書店より出版 ●『幸福の国へ』短編集（標題作品の初出は1921年『太陽』） ○「見えぬ太陽」（『国民新聞』連載）　→1924年『東京の顔』と解題し単行本として新潮社より出版 →戦後1949年共立出版より再版 ●『彼女の恋人』短編集　金星堂名作叢書32巻として金星堂より出版
1923	○「母」（『報知新聞』連載）　→1941年同名単行本として淡海堂出版部より出版
1924	○「珠を抛つ」（『東京朝日新聞』連載）→1925年同名単行本として新潮社より出版 →1927年松竹蒲田にて映画化：栗原すみ子主演 →1928年『現代長編全集第７巻』として新潮社より再版 →戦後1947年東方社より再版 →同年『長篇名作文庫』として矢貴書店より再版 →1949年『加藤武雄長編選集［1］』として東方社より再版 ●『感謝』短編集　新進作家叢書36篇として新潮社より出版 ○「新生」（『婦人倶楽部』連載）　→同年『煉獄の火』改題し単行本として大阪屋号書院より出版 →戦後1948年に『煉獄の火』梧桐書院より再版 ●『祭りの夜の出来事』短編集（標題作品の初出は1923年『新潮』）玄洋社 ◎『矢車草』寶文館より出版　→戦後1948年少年少女文庫撰として、まひる書房より再版 ●『都会へ』中編小説叢書として新潮社より出版
1925	○『夜曲』（『中外商業新聞』連載）　→同年、同名単行本として新潮社より出版 →戦後1948年都書院から再版 ○「審判」（『読売新聞』連載）　→1926年同名単行本として大日本雄弁会より出版：伊東深水装幀挿絵

		→戦後1948年洋洋社より再版
	○『春の幻』宝文館より出版	→1929年令女文学全集第一巻として平凡社より再版：加藤まさお装幀挿絵
		→戦後1948年湊書房より再版
1926	○「彼女の貞操」（『読売新聞』連載）	→同年、同名単行本として交蘭社より出版
	○「暁闇」（『時事新報』連載）	→1927年同名単行本として新潮社より出版
	「勝敗」（『キング』連載）	
	○「涛声」（『婦人公論』連載）	
	○「狂想曲」（『婦人世界』連載）	→1927年同名単行本として実業之日本社より出版
	○「愛染草」（『婦人倶楽部』連載）	→1927年同名単行本として大日本雄弁会より出版
		→戦後1948年に鷺ノ宮書房より再版
		→1950年『加藤武雄長編選集[3]』として東方社より再版
	○『愛の道』新潮社より出版	
	●『桑の実』短編集　新潮社	
	◎『君よ知るや南の国』大日本雄弁会講談社より出版：蕗谷虹児装幀挿絵	
		→昭和時代に須藤しげるや加藤まさおなどに挿絵を換えて再版
		→戦後1948年に妙義出版社より再版
		→1950年にポプラ社より再版
	◎『小鳥は空へ』児童図書館叢書、イデア書院より出版　→戦後1948年ロッテ出版社より再版	
1927	○「華髷」（『講談倶楽部』連載）	→1928年同名単行本として大日本雄弁会講談社より出版
		→戦後1948年『花かつら』と改題して鷺ノ宮書房より出版
	○「炬火」（『国民新聞』連載）	→1930年『長編三人全集第５巻』として新潮社より出版
		→1933年日活太秦にて映画化：夏川静江主演
	○「昨日の薔薇」（『婦人倶楽部』連載）	→1930年同名単行本として新潮社より出版
		→1930年日本キネマにて映画化：水城龍子主演
		→戦後1948年艸文社より再版
		→1949年湊書房より再版
	「光は暗から」（『朝日新聞』連載）	
1928	○「饗宴」（『毎日新聞』連載）	→1929年同名単行本として新潮社より出版
		→1929年日活太秦にて映画化：夏川静江主演
		→戦後1948年都書房より再版
	○「銀の鞭」（『講談倶楽部』連載）	→1930年『長編三人全集第５巻』として新潮社より出版
	○『竜胆』寶文館より出版	
	○『現代長編小説全集第７巻　珠を抛つ・久遠の像・月明』新潮社より再録出版	
1929	○「春遠からず」（『キング』連載）	→1930年『長編三人全集第２巻』として新潮社より出版
		→1931年帝国キネマにて映画化：徳川良子主演
		→戦後1948年湊書房より再版
	○「緑の城」（『婦人倶楽部』連載）	→1931年『長編三人全集第14巻』として新潮社より出版
		→1930年帝国キネマにて映画化：鈴木勝彦・英百合子主演
		→1942年読切講談社より再版
		→戦後1948年『加藤武雄傑作選集』として北日本社より再版
	○「白虹」（『報知新聞』連載）	→1930年『長編三人全集第８巻』として新潮社より出版
		→1932年日本小説文庫として春陽堂より再版

	◎『令女文学全集第一巻』（短編集）を平凡社から出版
1930	○「銀河」（『東京日日・大阪毎日新聞』連載）→1931年『長編三人全集第14巻』として新潮社より出版 →1931年松竹蒲田にて映画化　八雲恵美子・高田稔主演 ○「星の使者」（『婦人倶楽部』連載）　→1930年『長編三人全集第８巻』として新潮社より出版 →1932年「日本小説文庫」として春陽堂より再版 →戦後1947年東方社より再版 ○「火の翼」（『講談倶楽部』連載）　→1932年『長編三人全集第22巻』として新潮社より出版 →1932年新興キネマにて映画化 →戦後1948年東方社より再版 ○「愛の戦車」（『富士』連載）　→1931年『長編三人全集第20巻』として新潮社より出版 ◎『八犬傳物語』新潮文庫として新潮社より出版 →1949年に『南総里見八犬伝』（少年少女世界名作）と改題して偕成社より再版 →1949年『新編八犬伝物語』と改題して百万人文庫より再版 ○1930年から1932年にかけて『長篇三人全集』第２巻（沈黙の塔・春遠からず）、第５巻（銀の鞭・炬火）、第８巻（星の使者・白虹）、第11巻（明眸・無憂樹）、第14巻（緑の城）、第17巻（地上の愛・緑の地平）、第20巻（愛の戦車・夢の娘）、第22巻（火の翼）、第25巻（秋夕夢・狭き門）、第28巻（曙の歌・孔雀船）巻を担当し、新潮社より出版。三人のうち加藤以外は中村武羅夫・三上於菟吉。
1931	◎『海に立つ虹』大日本雄弁会講談社より出版　→戦後1947年ポプラ社より再版 ○『地上の愛・緑の地平』（新潮社、長編三人全集第17巻、1931） →『緑の地平』東亜京都にて映画化1931 →『緑の地平』戦後1948年東方社より再版：志村立美装幀 →『地上の愛』1954年東方社より再版 『加藤武雄読物選集』新潮社より出版 ○『明治大正文学全集　第53巻　中村武羅夫・加藤武雄』として春陽堂から再録出版
1932	○「孔雀船」（『報知新聞』連載）　→同年『長編三人全集』第28巻として新潮社より出版 →1933年『新選大衆小説全集第４巻』として非凡閣より出版：岩田専太郎装幀 →1933年松竹蒲田にて映画化：栗島すみ子主演 ○「不滅の像」（『婦人倶楽部』連載）　→1933年『新選大衆小説全集第4巻』として非凡閣より出版：岩田専太郎装幀 →戦後1948年青鞜社により再版 ○「東京哀歌」（『富士』連載）　→同年、同名単行本として新潮社より出版 →1935年『昭和長篇小説全集第９巻』として新潮社より再版 →戦後1947年鷺ノ宮書房より再版 ○『曙の歌・孔雀船』（新潮社、長編三人全集第28巻、1932）　→『曙の歌』新興キネマにて映画化 ◎『愛国少年文庫　源義経と成吉思汗』新潮社より出版 ○「秋夕夢」（『夕刊大阪新聞』連載）　→同年『長編三人全集第25巻』として新潮社より出版 ○「狭き門」（『都新聞日曜夕刊』連載）→同年『長編三人全集第25巻』として新潮社より出版
1933	○「三つの真珠」（『講談倶楽部』連載）→1934年大日本雄弁会講談社より出版 →1935年日活多摩川にて映画化：逢初夢子主演 →戦後1948年矢貴書店より再版 ○「幻の愛人」（『時事新報』連載）　→戦後1949年梧桐書院より再版 ○「春の暴風」（『日の出』連載）　→1942年文庫として春陽堂より出版 →戦後1953年東方社より再版

	○『大東京の屋根の下』日本小説文庫として春陽堂より出版 →1933年、所収されている短編「女性陣」が日活太秦にて映画化：高津愛子主演 ○「朝花夕花」（『中外商業新報』連載）
1934	○「華やかな戦車」（『報知新聞』連載） ○「珠は砕けず」（『キング』連載）　→戦後1948年梧桐書院より出版 ○「銀の征矢」（『九州日報』連載）　→戦後1954年東方社より出版 ○「喘ぐ白鳥」（『婦人倶楽部』連載）　→1936年同名単行本（文庫）として新潮社より出版 →1935年映画化（新興東京、伏見信子・高田稔主演） →1942年博文館文庫として再版 →戦後1948年東方社より再版：志村立美装幀 →1950年『加藤武雄長編選集［4］』として東方社より再版 →1950年『長篇小説名作全集』第21巻として講談社より再版
1936	○「合歓の並木」（『婦人倶楽部』連載）→1937年大日本雄弁会講談社より出版 →1937年新興東京にて映画化：高野由美主演 →1939年『新作大衆小説全集』第17巻として非凡閣より出版 →1942年博文館文庫として再版 →戦後1947年鎌倉文庫『大衆文学選』として出版 →1949年『加藤武雄長編選集［2］』として東方社より再版 ○「愛の山河」（『講談倶楽部』連載）　→1939年『新作大衆小説全集』第17巻として非凡閣より出版 →1937年新興東京にて映画化：高野由美主演 →1942年文庫として博文館より出版 →戦後1948年東方社より再版 ○「夢みる都会」（『富士』連載）　→1949年京北書房より出版 ○「呼子鳥」（『キング』連載）　→1941年同名単行本として →1937年新興東京にて映画化：河津清三郎・淡島みどり主演 →戦後1946年青踏社より再版 →1950年『長篇小説名作全集』第21巻として講談社より再版 →1972年『大衆文学大系』第17巻・講談社に所収
1937	○「華やかな旋風」（『講談倶楽部』連載）　→1949年梧桐書院より再版 ○「春雷」（『婦人倶楽部』連載）　→1939年同名単行本として大日本雄弁会講談社から出版 →1939年松竹大船にて映画化：夏川大二郎・川崎弘子主演 →戦後1947年鷺ノ宮書房より再版 →1956年東方社より再版 ○『珊瑚の鞭』新潮社より出版　→戦後1947年艸文社より再版 ◎『子供が良くなる講談社の絵本　木村重成』講談社より出版：小林秀恒画
1938	○「燦めく星座」（『日の出』連載）　→1939年新興東京にて映画化：淡島みどり主演、歌「燦めく星座」灰田勝彦 →戦後1945年梧桐書院より再版：志村立美装幀 →戦後1946年青踏社より再版：富永謙太郎装幀 ○「曠野の火」（『富士』連載） ◎『吹けよ春風』講談社より出版：蕗谷虹児装幀と挿絵　→戦後1948年ポプラ社より再版
1939	○「国難」（『キング』連載）　→1941年同名単行本として大日本雄弁会講談社から出版 →1959年（加藤没後）『現代長編小説全集　第52巻』講談社に所収

1940	○「新生の歌」(『講談倶楽部』連載) →1941年同名単行本として淡海堂から出版 →1941年新興東京にて映画化：加藤精一・青山くみ子主演 ○「母よ歎くなかれ」(『婦人倶楽部』連載) →1942年同名単行本として文林堂双魚房より出版 →1942年新興東京にて映画化：浦辺粂子主演 →1947年松竹株式会社出版部より再版：富永謙太郎装幀 →1955年東方社より再版 ◎『晴れ行く山々』童話春秋社より出版 →戦後1949年ポプラ社より再版 ◎『青空の歌』童話春秋社より出版 ○『銃後の愛』大都書房より出版 ＊『加藤武雄短編傑作集』全四巻（銃後篇・母性篇・田園篇・恋愛篇）を大都書房より出版
1941	▲『土の偉人叢書 二宮尊徳』新潮社より出版 →1951年『二宮金次郎：野の偉人』（偉人物語文庫12）と改題して偕成社より再版 →1960年『二宮金次郎：至誠と勤労の人』（世界偉人伝全集９）として偕成社より再版 ◎『新日本少年少女文庫 愛国物語』新潮社より出版 ○『朝歌夜歌』大都書房より出版 ◎『あらしの曙』少年小説 偕成社より出版：蕗谷虹児画 ○『美しき幻影』淡海堂より出版 ◎『講談社の絵本 徳川光圀』大日本雄弁会講談社より出版 ◎『小鳥の歌』大日本雄弁会講談社より出版 →戦後講談社より再版 ○『祖国・春の跫音』「新作大衆小説第27巻」として非凡閣より出版 ○『母なる大地』文林堂双魚房より出版
1942	○『女も戦ふ』淡海堂より出版 ▲『加藤武雄読切小説名作帖』時代小説集、文松堂より出版 ▲『新生』短編集 錦城出版社より出版 ○『愛の灯』蒼生社より出版 →1948年東光出版社より再版 ○『神の女（／むすめ／娘)』河北書房より出版 →1947年国民社より再版 →1948年東光出版社より再版 ○『春の暴風』文庫として春陽堂より出版 →戦後1953年東方社より再版 ▲『豊臣秀吉』上下巻 大日本雄弁会講談社より出版 ○『日本の母』新生堂より出版 ◎『日曜物語』（短編集）国民社より出版 ◎『海の英雄』博文館より出版 ◎『輝く海軍』博文館より出版
1943	『ふるさと人』昭和出版社より出版 ○『緑の樹蔭（こかげ)』新作大衆小説全集第39巻として非凡閣より出版 ●『我が血我が土』海南書房より出版
1944	◎『清水冠者義高』紀元社より出版 ◎『日本人間美』白林書房より出版 ◎『饒河の少年隊』偕成社より出版
1946	●『襖の文字 短編集』文学社より出版 ○『三人の求婚者』東京文化社より出版 ○『薔薇ひらくとき』湊書房より出版

	○『女性の凱歌』東方社より出版
	○『愛の告白』東方社より出版
1947	▲『叛逆』歴史小説　吐風書房より出版（「六十歳の処女作のつもり」）　→1954年講談社より再版
	○『愛の系譜』近代出版社より出版
	○『母の顔』艸文社より出版
	◎『慰めの曲』少女小説　偕成社より出版
	◎『悲しき別れ』少女小説　偕成社より出版
	◎『名曲ひばりの歌』少女小説　偕成社より出版　→1948年梧桐書院より再版
	◎『月夜の笛』子ども向け　偕成社より出版
	○『愛あらば』東方社より出版：木村荘八装幀
	○『美しき朝』泰文館より出版
	○『女人哀唱』金文堂出版部より出版
1948	◎『山路超えて』少女小説　川崎出版社より出版
	○『黄昏の都会』鷺ノ宮書房より出版　→1956年東方社より再版
	○『愛の太陽』晴嵐書房より出版
	○『女のいのち』梧桐書院より出版
	○『女は哀し』大和書房より出版
	○『女の夢』鷺ノ宮書房より出版　→1956年東方社より再版
	○『薔薇散りぬ』東方社より出版
	『失はれざる真実』梧桐書院より出版
	○『限りなき青春』梧桐書院より出版
	○『悲しき勝利』東方社より出版
	●『野の恋：天狗になった小作人の話』享栄出版社
	○『愛は星の如く』梧桐書院より出版
	○『女性の陣』短編集　日京書院より出版
	○『その夜の女』東江書房より出版
	○『愛の海峡』湊書房より出版
	○『新粧』湊書房より出版
	◎『あらしの曙』偕成社より出版：蕗谷虹児画
	○『牡丹崩れたり』東方社より出版
	＊『加藤武雄傑作選集』A（野の灯街の灯）・B（春の小鳥）・C（不明）・D（緑の城）・E（美紗子とその妹）が北日本社より出版
1949	○『地獄の聖歌』京北書房より出版
	◎『深山の乙女』少女小説　大泉書店より出版
	◎『春帰る日』少女小説　東方社より出版
	◎『夕星の祈り』湘南書房より出版
	◎『木枯吹けど：鳩のゆくえ』偕成社より出版
	○『わが愛は一つにして悲し』大衆文芸選書として梧桐書院より出版
	○『愛の処女地』大衆文学選書として梧桐書院より出版
	○『悲戀狂戀』大衆文学選書として梧桐書院より出版
	○『愛の曲』都書院より出版
	○1949～1950年にかけて『加藤武雄長編選集』全四巻（珠を抛つ・合歓の並木・愛染草・喘ぐ白鳥の再録）東方社より出版
1950	○『長編小説名作全集第21巻　呼子鳥・喘ぐ白鳥』として講談社より再録出版

1951	◎『日蓮上人』（講談社の絵本）講談社より出版
1953	○『美しき結婚』東方社より出版 ○『南の恋風』東方社より出版
1954	○『新たけくらべ』東方社より出版 ○『星は乱れ飛ぶ』東方社より出版 ◎『日本少年少女名作全集第18巻　木枯吹けど・吹けよ春風・海に立つ虹』河出書房より再録出版
1955	▲『大衆文学代表作全集第23巻　加藤武雄・木村毅集　叛逆・清水冠者義高』として河出書房より再録出版
1959	○『現代長編小説全集第52巻　加藤武雄・中村武羅夫集』として講談社より再録出版
1972	○『大衆文学大系第17巻　佐藤紅緑・中村武羅夫・加藤武雄』として「呼子鳥」が講談社より再録出版
1976	●『土とふるさとの文学全集２』に「土を離れて」「祭りの夜の出来事」が家の光協会より再録出版
	＊戦後も戦前と同じく短編を多く執筆（この表からは省いている）

＜加藤武雄による文学論とそれに関わる随筆など＞

加藤武雄（発表時ペンネーム　小林愛川）　1917　『明治大正文学早わかり』新潮社
加藤武雄　1924　『わが小畫板』新潮社
加藤武雄　1926　「十五年小説壇の諸家」『文章倶楽部』第11巻12号　新潮社
加藤武雄　1926　『明治大正文学の輪郭』新潮社
加藤武雄　1926　『小説の作り方』（入門百科叢書）新潮社（1947　大泉書店　再版）
加藤武雄・犬田卯　1926　『農民文藝の研究』（農民文藝叢書２）春陽堂
加藤武雄　1926　「農民文学とは何ぞや　農民文芸会座談会」『文章倶楽部』第11巻12号
加藤武雄　1932　『文藝随筆』玉川学園出版部
加藤武雄　1932　『砧村随筆』玉川学園出版部
加藤武雄　1933　「家庭小説研究」『日本文学講座　第14巻　大衆文学篇』改造社
加藤武雄　1935　『郊外通信』健文社
加藤武雄　1937　『子供を育てる母のよみもの』敬文館
加藤武雄　1940　「文学と生活」『ラヂオ講演・講座』日本放送出版協会
加藤武雄　1941　『随筆青草』道統社
加藤武雄ほか　1942　『国民文学の構想』聖紀書房
加藤武雄　1943　「鑑賞といふことに就て」『趣味の思索』教材社
加藤武雄　1943　『少女と教養』淡海堂出版
加藤武雄　1949　『我が日我が夢』大衆文藝社
加藤武雄　1949　「我が文壇生活回顧」『文章倶楽部』

＜参考文献＞

安西愈　1979　『郷愁の人　評伝加藤武雄』昭和書院
安西愈　1982　『加藤武雄読本　望郷と回顧』二七回忌記念出版
飯田祐子　1998　『彼らの物語―日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会
加藤正彦　2010　『伯父　加藤武雄』私家版
木村涼子　2004　「＜女が読む小説＞の誕生―1920～1930年代の通俗小説の展開」『大阪女子大学人間関係論集』第21集
木村涼子　2006　「＜女が読む小説＞による欲望の編成―1920～1930年代の『通俗小説』の世界」『大阪大学人間科学研究科紀要』第32巻
木村涼子　2010　『＜主婦＞の誕生―婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館
鬼頭七美　2013　『「家庭小説」と読者たち―ジャンル形成・メディア・ジェンダー』翰林書房
蔵本博史　2005　「融けあう領域―大衆文学を巡って」『法政女子大学紀要』第23巻
中村星湖　1956　「加藤武雄を偲ぶ　加藤武雄君のこと」『農民文学』11号　日本農民文学会
岡保生・和田芳恵　1980　「現代小説」『大衆文学体系　別巻　通史資料』
関肇　2007　『新聞小説の時代―メディア・読者・メロドラマ』新曜社

高木健夫　1987 『新聞小説史年表』国書刊行会
和田傳監修・加藤武雄　1982 『加藤武雄読本　望郷と回顧』加藤武雄読本研究会
山本昇　1995 「加藤武雄ノート」『解釈』481号

〇本研究は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究Ｃ：研究課題「1930～50年代マスメディアと女性—内容分析とライフヒストリー調査の結合」（研究代表者　木村涼子）の助成を受けておこなったものである。

Popular Literature for Women in Prewar Japan: Works by KATO Takeo

KIMURA Ryoko

Abstract

In modern Japan, both popular literature (taishu-bungaku or tsuuzoku-shosetsu in Japanese) and serious literature (jun-bungaku in Japanese) developed together with the mass media. The increase in educated and literate women led to the development of women's magazines and popular literature for women. Many of the earlier writers for popular women's magazines have been lost to history, as the ranking system in the world of literature put popular literature for women on an inferior level. This paper focuses on Kato Takeo as one of the forgotten popular writers for women's magazines, listing his works into a special bibliography, and aiming to analyze the history of popular literature for women from a gender perspective.